

〔紹介〕

アーノルド・A・ロゴウ『トマス・ホッブズ』(一)

岡 部 悟 朗

一 はじめに

本稿は、Arnold A. Rogow, 'Thomas Hobbes — Radical in the Service of Reaction —', W. W. Norton & Company, New York, 1986 の紹介である。

ロゴウは、リサーチ・サイコアナリストで、アイオワ大学スタンフォード校やニューヨーク市大で教鞭をとっている。著書は、'James Forestal' や 'The Dying of the Light' を含め、八冊を数える。

ホッブズ研究といえば、大抵、かれの政治思想、哲学論、学問(体系)論、宗教論等を中心にしていて、ホッブズ自身の生涯に関する研究は極めて少なく、言及したとしてもわずか数頁割くにすぎない。G・C・ロバートソンの 'Hobbes', 1910、F・テンニエスの 'Hobbes', 1925、J・レアーゾの 'Hobbes', 1934、R・ビーターズの 'Hobbes', 1956、C・H・ピナントの 'Thomas Hobbes', 1977 等、いずれも数頁、長くて十数頁である。しかも、これらは、ジョン・オーブリーの

‘Brief Lives’やホッブズの『自叙伝』、及び、数多くないホッブズ書簡をもとにしている。これに対し、ロゴアの‘Thomas Hobbes’は、それらの資料を批判的に検証するだけでなく、その他の当時の資料をも渉獵し、ホッブズの全生涯を扱った最初の完全な伝記といえるものなのである。

ある人の思想や哲学を考察する場合、その人の生涯を知らずして研究出来ないことはいうまでもない。しかし、ある個人の人生上の諸事実と、その人の知性史との関係は、単純・明解・直接的なものではない。とりわけ、ホッブズに関してそうした関係を問おうとする場合には厳しい注意力が要求される。従来の研究で、例えば、ホッブズがその『自叙伝』で述べた「恐怖との双生児」という生誕の事情がかれの思想における「恐怖」の概念の重視と結びつけられたり、「幾何学との恋」というエピソードがかれの学問体系論の特質と結びつけられて、主張されたが、果してそういう結びつけ方は短絡的とはいえないのであろうか。我々は、もっと事実を究明し、複雑に絡みあつた糸をときほぐし、その果てに思想と結びつけなければならない。

ホッブズの場合、人生上の「事実」が屢々資料として欠落する為に、一つの伝記を編むことは並大抵のことではない。ロゴアはサイコアナリストとして精神分析的手法を用いるが、そののみを用いるのではない。かれが精神分析的洞察を利用するのは、あくまでホッブズの生涯と知性史の双方をより完全に理解しようとする場合であつて、基本は丹念な事実収集と実証的分析に手法を置いている。

本書は、補論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを除けば、十章二三一頁で構成されている。因みに章題を示せば、以下のとおりである。

第一章 マームズベリ

第二章 オックスフォード

- 第三章 ハードウィックとチャットワース
- 第四章 ツキュディデス
- 第五章 運動——過程と瞬間
- 第六章 亡命第一号
- 第七章 『リヴァイアサン』
- 第八章 諸々の論説と論争
- 第九章 冬の熊
- 第十章 ホップズ——その時代と現代

本稿は、ほぼ章の順序に従うが必ずしも各章毎に紹介するものではない。また、一つの章の範囲内では、原著者の叙述の順序にしばらくは従わず、本稿の読者にとってより理解し易いと思われる叙述方法を採用した。しかも、オーブリーやそれに基づくこれまでの諸研究で言及されたことは出来るだけ省き、新しくかつ問題と思われるところのみに限定して紹介することにした。

## 二——(一) 故郷・誕生・家系

ホップズ生誕の地ウイルトシャー州マームズベリ(精確にはその近郊のウエストポート)は、当時も今も美しい町である。曲りくねった丘の上に、丘の形状に合わせて曲りくねった大通りと石造りの家並が走り、道と家並は町の中心ベネダイクト修道院へと向う。

この町はローマ時代には存在していなかったらしいが、紀元六七五年を最初の存在記録としている。(水田洋は「六三五年頃」とする。ホップズ『リヴァイアサン』、河出書房新社、世界の大思想「解題」四八六頁) そのころには、修道院が存在していたことが確認されている。尊師ベータ (the Venerable Bede) は、七〇五年のマームズベリについて触れ、修道院長はアルドヘルム (Aldhelm) であったと記している。(ベータ、長友栄三郎訳『イギリス教会史』創文社 一九六五年、四一〇頁) マームズベリは、当時、アイルランド系の呼び方でマイドゥフ (マイドゥウィ・ウルプス) と呼ばれていたが、このマイドゥフとアルドヘルムの名が混成されて、マームズベリの名を生んだらしい。(ベータ、同右、四一一―二二頁) 七〇九年のアルドヘルム没後、凡そ二〇〇年間、マームズベリについて殆ど明らかでない。しかし、サクソン時代の末期に向う八八〇年にアルフレッド王が城砦都市 (borough) につくりかえ、以後、城市 (borough) として存続している。マームズベリは、一九八〇年に、イングランド最古の城市として、アルフレッド王勅許下賜一一〇〇年祭を挙行した。ホップズが誕生した頃、既に七〇〇年以上、自治都市 (borough) であったわけである。(水田、前掲「解題」は「一六四五年、自治権を与えた」とする。) ホップズの伯父エドモンド (Edmund) もフランシス (Francis) も市参事会員であったが、こうしたマームズベリの自治都市としての長い伝統は、ホップズの自主・自立的精神を醸成したとみてよい。

経済的側面からマームズベリをみると、一二世紀以降の四世紀半、比較的平穏無事で、その間、毛織物貿易を通して発展し、一四世紀頃には織物業の重要拠点となっていた。一六世紀初葉には年間三千クロスに達する高品質の織布を生産した。一五三九年十二月に修道院が廃院となり、一五四二年、ウイリアム・スタンプ (William Stampe) がそれを購入した。かれは、エリザベス時代きつての巨大・織布マニユファクチュア経営者で、修道院をマニユファクチュアに作りかえ、イングランド最初の工場を創った。

人口数等については精確な情報に欠けるが、一五四八年の調査によれば、在住教会員 (Communicants) は八六〇名であったとされる。その数から判断して、マームズベリの人口は千名内外であったと推定される。マームズベリの人口が千

名程度であったとすれば、イン格蘭ドのシテイやタウンの平均規模は一六八八年近くまで千名余であったから、比較的人口の多いタウンであった。なお、マームズベリの住居は一五〇―二〇〇軒程度であった。

マームズベリ及びその近郊には、ウイリアム・ペン、ジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーンの祖先が住んでいた。ペン家は、マームズベリから五マイルのメインティが発祥の地である。マームズベリから二マイルの距離にあるガルスドン・マナーには、サルグレイブ・ワシントン一族 (Sulgrave Washingtons) が居を構えており、その中からジョージ・ワシントンが出た。アブラハム・リンカーンの母ナンシー・ハンクスは、マームズベリの人である。ハンクス家はマームズベリ一番の旧家で、サクソン時代からここに住みついていた。

一六世紀末期のマームズベリの典型的な家屋は、その地方の石灰岩で造られ、屋根は瓦で葺かれていた。普通、居間一室、地下に貯蔵室か食糧室、それに二階に一、二部屋の寝室から成っていた。マームズベリの近郊ウエストポートのこうした家の一軒、即ち、テッドベリに向って歩いて、右手にある教会を通り過ぎ、左手の一番外れの家がホップズの生家であった。生家は現存していない。

家具についても詳らかではないが、比較参考上、以下のものを掲げておこう。それは、一六六三年四月に亡くなったメアリー・メイなる寡婦の遺産目録である。メイの遺産は、当時の標準からすれば決して貧しくはなかったと思われる。メイの遺産に比較すれば、推定年収六―八ポンドの父ホップズの収入からして、ホップズ家の調度はかなり下廻るであろう。メイの遺産目録は以下のとおりである。

広間——食器箆筒、食卓、架台、長椅子、古風な肘掛椅子、一五シリング。

応接間——古風な寝台枠組、羽蒲団、長枕二つ、(羽毛) 枕二つ、毛布三枚、毛層入ベッド一台、三ポンド一〇シリング。  
寝室——椅子三脚、寝台枠組二台、カーテン、ベッドカバー、毛布、一〇シリング六ペンス。

まき載せ台二組、やつとこ一組、暖炉用シャベル、鉄串、壊れた寝床用あんか、八シリング六ペンス。

板張椅子一脚、腰掛二脚、糸車二台、古ぼけた(羽毛)枕、テーブル、洗濯物入れ、櫃二匣、及び小道具少々、一ポンド六シリング八ペンス。

衣類と現金、一ポンド九シリング六ペンス。

概算——八ポンド〇シリング二ペンス。

このような町の、ほぼこうした家具を備えた家に、ホップズは、一五八八年四月五日、生まれた。ホップズの誕生については、かれ自身のラテン語韻文による『自叙伝』の中で、スペインの無敵艦隊の襲来に驚愕した母が早産し、「私自身と恐怖という双生児を同時に生み落した」と記している。これまでの研究では、この叙述が批判的に検討されることなく事実とされた上で、かれの「臆病な」性格とか、諸情念の中の「恐怖」の概念の重視とか、また祖国の敵を憎み平和を愛好する精神とかに結びつけられて論じられてきた。

しかし、ホップズが『自叙伝』で語った事は事実なのだろうか。まず、スペインの無敵艦隊から検討を始めよう。

ロゴーによれば、無敵艦隊の動向は以下のとおりである。(ロゴーの以下の記述は、Michael Lewisの『The Spanish Armada』によっているが、同著を典拠にしている平凡社百科辞典の「無敵艦隊」の項の説明とは、グレゴリオ暦を換算しても日数が若干異なっている。)無敵艦隊は、一五八八年五月一八―九日にスペインのペレム要塞を出帆しようとしたが、風が北風のため、出帆できなかった。七月十一日に第二回目の出帆が試みられ、今回は成功した。七月一九日―二〇日にイングランド南西海岸近くに達する。しかし無敵艦隊は敗れ八月二日までは北へ向って潰走する。スコットランド沖から大西洋を迂回してスペインに帰国した時には出帆時の半数に減っていた。

こうした経過からすれば、失敗した第一回目の出帆時の一ヶ月前に、ホップズの母が恐怖の余り、早産したというのは

いささか怪しい。たとえ四月頃に無敵艦隊がイギリス海峡に達していたとしても、南部海岸から凡そ五〇キロも内陸のマームズベリに直接の脅威を与えたとは考えられない。とはいえ、一五八七年十二月に、イギリスの海岸都市の何人かの住民が、無敵艦隊がイギリス海峡にいるという知らせで逃げだしたのも事実らしい。だから、一般的には、英国人が無敵艦隊に脅えていたといえるとしてもパニックに陥っていたとはいえないし、また、その事実もない。

しかし、無敵艦隊の事は別にしても、それとは異なる不安要因があった。即ち、「一五八八年」という年について様々な予言がなされ、それが不安をよんでいた。古くは、一四七五年、レギオモンタヌスとして名を馳せるドイツの数学者で天文学者ヨーハン・ミュラーは、「キリスト生誕後、一〇〇〇年、更に天文時間五〇〇年後、驚異の八八年が始まり、時が経つにつれ余りある災厄をもたらす。この年、全破局が起らず海陸すべてが全滅しないとしても、全世界は大変動を起し、諸帝国は衰微し、あらゆる地域から極まりない悲嘆の声が流れるであろう」と予言した。ホップズの時代に近づく、プロテスタントの改革者フィリップ・メランヒトンは、ルターが法皇に挑戦した一五一八年から、七年周期の十回目周期にあたる一五八八年は、最終期として、第七の封印が開封され反キリスト者が打倒され、最後の審判が間近となる開始年だと予言した。また、一五八八年に向けてオランダの曆書は、「八月が過ぎれば事態は鎮まるだろうが、暴風雨、恐るべき大洪水、真夏の雹と雪、真昼の暗黒、血のような雨、奇形の誕生、大地の奇怪な変動」を予言した。一五七六年のイギリスの一パンフレットは、枢密院の禁止令にもかかわらず、一五八七年に再版されたが、それは不吉な出来事と解される二回の月蝕のうち二回目の月蝕が起ること、即ち、女王エリザベスの占星術上の運命星、処女宮において生ずるとして、主権者の崩御を予言していた。また、ホップズを一時期、雇ったこともあるフランシス・ベーコン(1561-1626)は、『随想集』(「予言について」『ベーコン随想集』岩波文庫、一六三―一六五頁)の中で、「自分が子供の頃、そして、エリザベス女王が花盛りであった頃、以下のような「ありふれた」予言を聞いたと記した。即ち、「大麻(Hempe)がつむがれる時、イングランドは終わらだ。」と。「Hempe」とは、英国国王「Henry, Edward, Mary, Philip, Elizabeth」の「頭文字」を

表わしており、王たちの君臨後「イングランドは大混乱に陥る」意味だとかれは解釈を施した。ペーコンはまた、一五八八年に向けての別の予言を記憶していた。即ち、「ある日、ポーとメイとの間に、ノルウェーの黒い艦隊が見られるだろう。それが来て去る時、イングランドは石灰と石で家を建てる、戦後には何も持てなくなるから。」ペーコンは、「それは一般に、一五八八年（岩波文庫は「一五八九年」となっている。一六五頁）に来襲したスペイン艦隊のことをいったものだと考えられた。スペイン王の姓はノルウェーであると噂されているからである。」と評釈した。「ポー」というのは、スコットランドのファース・オブ・フォース川河口の大きな岩の名であり、「メイ」は同河口にある小島の名である。予言どおり、一五八八年潰走したスペイン無敵艦隊の一部がこの岩と小島の間を追いこまれた。

こうした各種の予言が不安を醸成し、当時の市民と同様、ホップズの母も不安にかられていたとみてよいであろう。スペイン無敵艦隊来襲の噂は、これらの予言が引き起した不安を裏付ける一つの兆しであったに相違ない。多くの予言は大抵、聖書に基づいてなされ、また、国教会下級牧師と結婚したホップズの母の信仰心からすれば、こうした予言が彼女にかなりの動搖を与えたことは推察できる。無論、彼女への予言の影響については推測の域をこえることができない。しかしながら、信仰心薄く懐疑的なホップズにとってみれば、自分の誕生の事情を迷信や宗教上の予言と結びつけたのはなかつたろう。だからこそ、自分の誕生の事情をスペイン無敵艦隊来襲の噂に結びつけたのであろう。また、ホップズは、自分の誕生日四月五日が、一五八八年の聖大金曜日、即ち、カトリックで復活祭前のイエス受難記念日であったことをどこにも触れなかった。

オーブリーによれば（『名士小伝』富山房百科文庫 九五頁）、ホップズの母は、マームズベリ近郊の小村ブローケンバラのミドルトン (Middleton) なる家の出自で、ミドルトン家は独立自営農民インディペンデント・ファーマーであった、という。我々は、ホップズの母に關してオーブリーの情報しかないわけであるが、しかし、ブローケンバラ、その近隣のウエストポート、マームズベリ、あるいはウィルトシャー州やグロースタシャー州の地方記録保管所、教区記録保管所、マームズベリ市議会議事録等のあら

ゆる情報源によっても、Middleton, Myddleton, Myddleton なる一族の記録は発見しえない。生憎、一六世紀後半から一七世紀前半にかけてその地方の、結婚、洗礼、死亡記録が不完全であるという事情もある。唯一、ソールズベリーの聖マーチン教区で一五七八年五月三日、トマス・ホップズなる男と結婚したアリス・コートネル (Alice Courtnell) なる女性の記録がある。ホップズの兄の孫娘の一人は、Alice あるいは Alice と命名されており、ソールズベリーはマームズベリーからそう隔たっていないことから、ホップズの母は実はアリス・コートネルだとする者もいる。しかし、一七世紀のイングランドでは、ホップズであれ、トマスであれ、またアリスであれ、実にありふれた名なのである。

ホップズの祖父は、ジョン・ホップズといい、ホップズの父と同じく国教会牧師であった。一五二〇年から二五年にかけてオックスフォード大学ニューカレッジ校に在籍し、二九年にはティルスヘッドの教区主管者代理 (vicar) を勤めた。

ジョン・ホップズは三人の息子を得たが、長男はエドモンド (Edmond) といい、一六〇六年四月二二日まで存命した。マームズベリー・アベール教会祭壇下部の真鍮板碑文には、「エドモンド・ホップズの身体、ここに眠る。我が町の市民 (burgess) であった。一六〇六年四月二二日没。すべての復活を願う。」と刻みこまれている。かれは、再三、マームズベリーの市参事会員を勤めた。

次男フランシス (Francis) は、後にホップズの兄やホップズを経済的に支える人物である。裕福な手袋製造業者で、マームズベリーの市民 (burgess) かつ市参事会員であった。かれは、僧院に泊りに来た訪問客の馬に草を喰わせた牧草地を意味するガストン (Gaston = guest) ・グラウンドをホップズに遺贈した。そこは、当時としては相当の額である年間一六ポンドの収入があった。かれは晩婚で、子供も無く、一六三八年に亡くなったらしい。

三男が、我がホップズの父、同姓同名のトマス・ホップズである。父トマスの生年が、一五四七年であることは確定しうるのであるが、没年についてははっきりしない。それはかれが一六〇〇年頃、マームズベリーから失踪したためである。確定できないのであるが、その地でその頃に亡くなったのではなく、ロンドン近郊のシスルワース (Thistleworth) で祈祷

朗読者 (reader) を勤め、凡そ八〇才で一六三〇年頃亡くなったらしい。かれについては、後に詳述しよう。

父トマスと母アリス・ミドルトン(?)との間に、我がホップズの兄エドマンド (Edmund) (1586-1667)、我がトマス、そして妹のアン (Anne) が生れた。妹アンの系譜から述べると、彼女は、トマス・ローレンス (Thomas Lawrence) なる人物と結婚し、七人の子供をもうけた。彼女は、我がホップズの生家を父から遺贈されたが、彼女の死後彼女の子供の一人が彼女の名を受け継いだ娘アン (Anne) がそれを相続した。その娘アンは、リチャード・ゲイ (Richard Gay) なる人物と結婚し、アン・ホップズ・ゲイを名のつた。

我がトマスの二才年長の兄エドマンドは、伯父フランシスの手袋製造業を継いだ。かれには、フランシス、メアリ、エレノア (Eleanor) という三人の子がいる。メアリとエレノアは、我がトマスから遺産を贈与された。兄エドマンドは、三人の子供たちから五人の孫を得た。孫の一人がアリス (Alice) であるが、この五人の孫のうちの三人と曾孫の一人がトマスを名のつた。曾孫のトマスも我がトマスから遺産を贈与された。エドマンドの孫でトマスを名のる人物は三人いるが、そのうちの二才年長の孫は、アン・プレイヤー (Anne Player) と結婚し、その直系の子孫がメイジャー・アドリアン・リングリー・フォズブルック・ホップズ (Major Adrian Wringley Fosbroke-Hobbes) である。かれは、一八九六年に生れ一九三五年に没した。かれの子供が三人とも娘であったため、ホップズのファミリー・ネームを伝える最後の末裔となった。かれの娘の一人は、バークシャー州クrounソンのジョージ・トルエル (George Truell) と結婚した。トルエル氏は、今も健在である。

さて、父トマス・ホップズに立ち帰ろう。これまでの研究で父トマスに関する叙述は、殆どジョン・オーブリーの情報にもとづいている。実は、ジョンの情報は、ジョンの弟ウイリアムの情報によっており、このウイリアムが兄に書き送った情報が完全には正しくなく、少なくとも公正なものではないのである。

まず、ジョン・オーブリーは、父ホップズをマームズベリとウェストポートを合わせた教区主管者代理 (vicar) だとし

ている。父ホップズはヴァイカーだったのであろうか。Alumni Oxonienses, 1500-1714 (Oxford, 1891) は、父ホップズを「ウィルトシャー州のウエストポート並びにチャールトンのヴァイカー」としている。しかし、一五八九年五月二七日と確定される Salisbury Consistory Court の供述録取書は、かれを三二才の牧師補 (curate) と記録するのを初めとして、その後の Delecta Book, 1588-1599 や Act Book of Office, 1601-1604/5 もかれをキュレイトとしている。(実は、後述するように、当時のその教区のヴァイカーはヘンリー・ロンゲなる人物である。) (因みにラスレットは「聖メアリー教区の牧師補、偉大な哲学者トマス・ホップズの父」と記す。ピーター・ラスレット、川北稔他訳『われら失いし世界』三嶺書房 一〇四頁)

また、オーブリーは、父ホップズを「無学の『サー・ジョン』の類」と記すが、この記述もいささか怪しい。というのは、オックスフォード大学ブレイズノーズ・カレッヂの一五八七年の記録簿に以下の記載があるからである。「Hobbs Thomas (Glauco.), Priv. natr. pleb. 19 Apr. aged 40; Adm. 29 Apr. 1587」。この記載からすれば、「グロスタシャーのトマス・ホップズ。四〇才。労働者階級の出自。(ロゴーがいうように、a working class family と解するより、平民の出自の方がよいと思われる。) 非公式に、即ち、式典なく四月一九日に入学許可され、一五八七年四月二九日入学」ということになる。なお、在学期間は不明だが、一五八九年五月までにはマームズベリに帰郷している。ブレイズノーズ・カレッヂへの入学が事実だとすれば、短期間であれ在学したことは、父ホップズを「無学」とするのはいい過ぎであろう。

また、オーブリーは、「父ホップズは、かんしゃく持ちで、……同僚の牧師を殴りつけてしまい、それが原因で逃亡せざるをえなかった」と述べている。確かに当時、質の悪い僧侶がかなり多くいた。賭け事や酒飲に耽つたり、あげくの果て喧嘩するのも頻繁であった。しかし、一五六〇年から一六〇〇年にかけて、大学が僧侶を教育するにつれ、僧侶のモラルも改善され、次第にその地位や経済状態もかなり向上していたのも事実である。

さて、それはさておき、父ホップズが逃亡せざるをえなかった事件の真相はどうであったのであろうか。一五九〇年、ウエストポート分会堂<sup>チャペル</sup>ブローケンバラ小教区委員たち (church wardens) は、ウィルトシャー司教座<sup>カテドラル</sup>聖堂助祭に、かれら

の牧師補が「民衆酒場の常連だ」と訴え出ている。しかし、その牧師補が父ホップズであるかどうかは確認できない。その後、一六〇二年十一月に、「Magister Hobbes clericus curate de Brokenborow」は、四季説教せず、青年に教理問答を教授しなかった廉で訴えられ、十二月に最告発されている。しかし、そのことによつて父ホップズに何らかの懲戒や処罰が加えられたとは伝えられていない。とはいえ、一六〇二年頃、父ホップズが、ブローケンバラの小教区民 (parishoners) と種々のトラブルを起していたことは確からしい。そのトラブルの原因は、父ホップズがブローケンバラに在住することを義務づけられていたにもかかわらずウエストポートに在住し続けていたことであつた。そのため、ブローケンバラとウエストポートの間にある川の水位が上るたびに、屢々、ブローケンバラの結婚式や洗礼式や葬式等の教会儀式が行われなかつた。それに、日常的に、父ホップズの種々の怠慢がつけ加わつた。かれは徹夜のトランプ遊びが好きで、そのため、屢々、説教中、居眠りをした。

ウエストポート教区主管者代理は、その地位を二十年間勤めたヘンリー・ロンゲ (Henry Longe) なる人物で、牧師補は教区主管者代理を補助しなければならぬ関係にあつた。当時、「教区主管者代理の下級職 (vicar's man) は全く不十分である」との報告がなされている。その「下級職」の者とは紛れもなく父ホップズのことである。

また、父ホップズの牧師補としての収入の一部は、ブローケンバラ小教区民によつて負担されていたが、以上の諸原因のために、ブローケンバラ小教区民は父ホップズの収入の一部の差押えと支払い停止の訴訟をおこすに至つた。しかし、残念ながら、この訴訟の結末についても不明である。

別の、より重要な法廷議事録がある。父ホップズは、「ブローケンボロー (Brokenborow) の……しかしウエストポートに在の牧師補」と言及されている。この裁判は、父ホップズが、フォックスリーの教会主管者 (rector) リチャード・ジーン (Richard Jeane) を「ならず者、名うてのならず者、呑んだくれのならず者、同僚牧師 (brother minister) アンドローズ (Andrews) 殺し」と誹謗した廉で起された。一六〇三年十月十二日に審理が開始され、十月二十五日、十一月八日、

十一月二日、十二月六日と続けられた。父ホップズは、弁明することができなかったらしく、一六〇三年十二月か翌年の一月に、ソールズベリ教会法廷は、二月五日朝の祈禱時に会衆の面前で贖罪を行うよう判決を下した。しかし、父ホップズは二月五日の祈禱時に姿を現わさなかったため、一月八日、ジーンは裁判所に「上記ホップズ(Hops)による贖罪に関する公式書状」によって訴えた結果、同法廷はその請求趣旨申立てを認め、父ホップズを破門に付した。父ホップズは、この判決によっても改悛の情を示すどころか、一層、反抗的な態度を募らせたらしい。

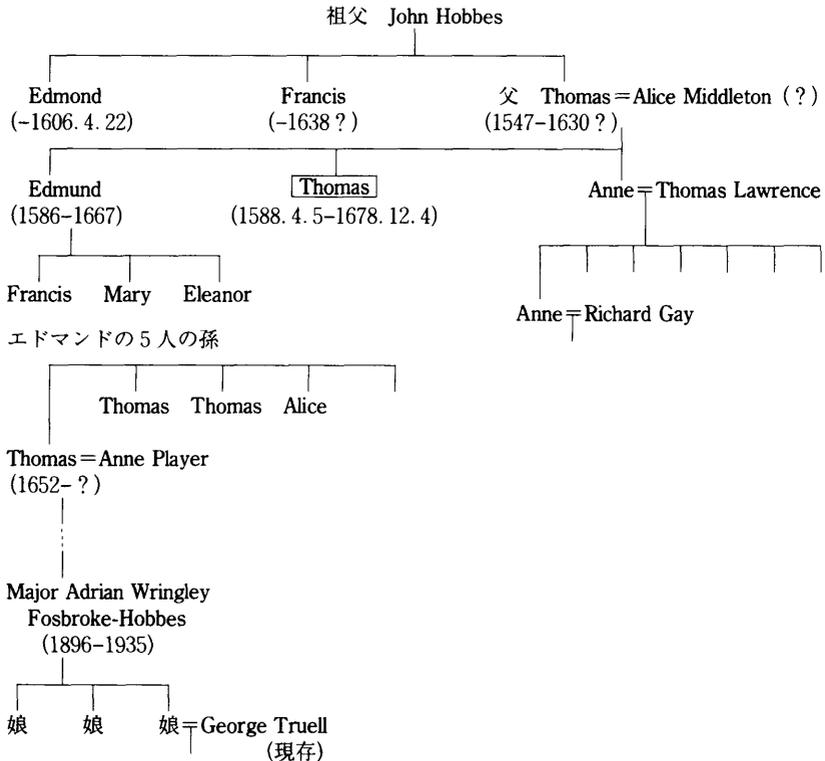
一六〇四年二月二二日、父ホップズによる「フォックスリーのリチャード・ジーンに対する暴行」に関する法廷が開かれた。その時の証人、年齢凡そ六〇歳、ウェストポートの借地農(husbandman)ロバート・グラウンジャー(Robert Graunger)の証言によれば、「今月のついで二週間前か一週間前の土曜日、……[グラウンジャーが]マームズベリの肉屋のところまでマームズベリ教会付属庭地の近くに立っていると、トマス・ホップズがさほど離れていないところに佇んでいるのを見た。……ほどなくフォックスリーの牧師(parson)がやってきて、教会の庭に入ってしまった。……かれが上記の教会の庭に入っていくと、上記トマス・ホップズ(Hops)が上記ジーン氏の後にいき、破門したのはどういう積りかと罵り始めた。そこで上記ジーン氏が自分が君を破門したのではないと答えると、上記ホップズは罵りながらジーン氏を追い、ならず者といい、かれに近づくとこぶしで耳や頭の辺りを殴りつけた。そのため、帽子は吹つとび、マントが背中から落ちた。上記ジーン氏は、上記ホップズがまとわりついている間中、暴行を受け、ホップズはジーン氏を殴るのをやめようとしなかった。そこで、ジーン氏は、身を護るため、トマス・ホップズを殴り、かれを振り払って地面に投げとばした。」ソールズベリ教会法廷は、父ホップズを再度聴取しようとしたが、かれは姿を現わさなかった。二月二二日頃、かれはマームズベリを去り、ロンドン近郊のシスルワースに逃げのびた。かれは二度とマームズベリに姿をみせなかった。

牧師補であった父ホップズが、ブロークンバラに在住し、勤勉に勤務していたとすれば、年収は六〇乃至八〇ポンドに

達していたであろうが、ブローケンバラに住むことを拒んだため、その収入は十分の一にも達しなかった。しかも、一六〇四年二月二二日頃以降は家庭を完全に放棄してしまったのである。我がトマス・ホップズも、その前年、一六〇三年に、一五才にしてオックスフォード大学入学のため、マームズベリを去っていた。

我がトマスが、父ホップズに言及することは無いが、父ホップズが徹夜のトランプ遊びに興じた挙句、翌日の説教の最中に居眠りをし「クラブの勝ち」と叫んでしまったエピソードを思い出してか、後年（一六六一一年）、『イングラントにおける哲学者と慣習法の学徒との対話』（公刊は、ホップズ死後の二六八一年）の中で、法の下の主権の行使をトランプ・カードの賭け事になぞらえ、「それ以外は、統治の問題で、他に何ものも認められない場合、クラブの勝である」と記した。

ここで、ホップズ家の家系図を素描しておこう。



二一(二) 少年時代

オーブリーによれば、ホップズは「少年の頃、大層遊び好きだったが、一方その頃から既に物思いに沈む癖もあった」  
 そうである。(オーブリー、前掲書九八―九頁)「遊び好き」だったとすれば、戦争ごっこやレスリングごっこ、駆けっこや  
 輪回し遊びをしたり、弓をひいたり、また、エイヴォン川で泳いだり魚釣りをしたことだろう。「鳥の巣作り」に耽った  
 かもしれない。それは、出来るだけ多くの違った巣から鳥の卵を集め、卵に小さな穴をあけ、中味を吹き出し、卵に糸を  
 通す遊びである。その完全な形のコレクションを持つ少年は大変な賞賛的になった。ホップズは、オックスフォードの  
 学生の頃にも、特に夏場には、鳥もちで鳥をよくつかまえたらしい。光学上の興味ある点として、小鳥の鋭い視覚のこと  
 を、オーブリーに語っている。また、「トチの実遊び」(conker)に興じたかもしれない。ひもを通したトチの実で相手の  
 トチの実を数回たたき、実がかかり壊れたりした方が負けである。こうした遊びは、二〇世紀前半でも行われていた。  
 マームズベリでは、年間、数多くの祭が行われており、個人や団体の様々なゲームや、あやつり人形劇、道化、踊り、  
 のど自慢が催された。羊毛袋かつぎ競走は、普通、四人の走者からなる団体競技で、凡そ一〇〇〇米を凡そ三〇キロの羊  
 毛袋をかついで疾駆するものであった。祭には、多くの音楽が演奏されたり歌われたりした。ホップズは少年時代、音楽  
 に熱中したし、後年になってもリュートやバス・ヴィオールを演奏した。随奏歌曲を就寝前に歌うのを習慣にしており、そ  
 れが肺を強化し、長生きさせると信じていた。

「物思いに沈む傾向」ということからすれば、遊びやスポーツよりも読書の方を一層好んだかもしれない。「四才の時、  
 ウェストポート教会の学校に上がり、八才まで通った。その頃になるとよく読め、四桁の数をかぞえられるようになって  
 た」とオーブリーは伝え、ホップズは『自叙伝』の中に「四年間話すことを学び、更に四年間読み、計算をし、そして文

字をほどほど書くことを学んだ」と記した。

ホップズは八才から、オックスフォードに赴く一五才まで、ロバート・ラティマー (Robert Latimer) に私淑する。この頃、ラティマーは、一九か二〇才のほやほやの学士であった。(ホップズは、ラティマーが亡くなる直前、一六三四年の夏、当時リー・テラメアの教会主管者 (rector) になっていたかれを訪ねた。オーブリーは、ラティマーが七〇才で一六三四年になくなったと記しているから、それが事実だとすれば、一五九六年からの数年間はラティマーは三〇才代であったことになる。) ラティマーは熱意のある教師で、中でもホップズは利発な弟子であった。かれは弟子たちにギリシア語とラテン語を教授した。ホップズは、オックスフォードへ去る直前、エウリピデスの『メディア』をギリシア語からラテン語に翻訳し、それをラティマーに献じた。その翻訳は、残念ながら現存していない。ラティマーの家政婦がカマドで燃やし処分してしまったといわれる。宗教的懐疑論者であったエウリピデスは、当時、現実主義者とみなされていたし、かれも人間のあるべき姿よりあるがままの姿を描き、また、(ペロポネソス) 戦争を人間にとって最悪の危害だとみなした。

エウリピデスの『メディア』の主人公は、女神ヘラスの血をひく女魔法使いメディアである。その劇が基にする伝説は以下のとおりである。イエソンが金羊皮 (Fleece) を求めて、メディアの父で金羊皮の保管者アイエテス王の下にやってくる。イエソンとの恋に陥ったメディアは、兄を殺し身体をバラバラにし海に投げ込み、アイエテスがそれを拾い集めるうちに時間をかせぎ、イエソンとともに逃亡する。イエソンはイオルクスに世襲王国をつくるが、イエソンを裏切ったかれの伯父ペリアスに対しメディアは復讐することになる。ペリアスの娘をそそのかしてペリアス殺害に成功するが、しかし、そのことからイエソンとメディア、それに二人の息子たちは逃亡せざるをえなくなる。エウリピデスの劇は、新しい安住の地コリントから始まる。イエソンは、好運を得ようと、コリント王クレオンの娘を新しい妻にしようとしメディアとの結婚を解消する。メディアは、クレオンとその娘を殺害するが、コリントでは自分と息子の身が安全でないと確信して、二人の息子を殺しアテネに旅立つところで、幕はおりる。

ホップズは、後に、『メディア』のペリアスの話を、『政体論』、『法の原理』、『市民論』、『リヴァイアサン』の中で用いる。『政体論』では、叛逆が、煽動と饒舌とによって、また分別の欠如から起るとする文脈で、ペリアスの娘たちは、「かの草との老衰した父を、若き頃の活力に回復するために、メディアの忠告によってかれをバラバラに切り、私も知らぬ何かの草と一緒に大釜で煮たのだが、かれを再びよみがえらせることは出来なかった。そのように、饒舌と、判断力の欠如が合わさって動く場合には、ペリアスの娘たちのような饒舌によって、改革という口実や希望のもとにコモンウェルスをバラバラに切り刻むことに応ずるのである。」と記している。

また、ブラムホール大僧正への返書において自由意志を論じた『自由と必然について』では、「あるがまま美しい諺は、真実ではない。というのは、メディアは、自分の子供たちを殺すのを思いとどまることが道理であると解していたが、しかし、かの女の判断の最後の命令は、夫に対する今の復讐がすべてにまさっており、そこで邪悪な行動が必然的に生じた」と書いた。

無論、『メディア』を翻訳した頃の少年ホップズと、後年のホップズにとつては、『メディア』への共鳴や意味が同じだとはいえないだろうが、『メディア』の中に、自分と同じ何らかの家庭悲劇をみい出していたと想像してもよからう。イエソンのメディアや子供たちに対する仕打ちには、父ホップズの家族に対する仕打ちとどこか通じてはいないだろうか。メディアの怒りの狂気に、リチャード・ジーンを暴行した父の気質をみてとらなかつただろうか。ホップズの兄弟は父ホップズの怒りの気まぐれな標的にならなかつたであろうか。子供を扶養せざるをえないメディアとホップズの母は境遇が似ていないだろうか。残念ながら、憶測の域をこえることはできない。

しかしながら、『メディア』の中の次の成句は、ホップズの人生に強く刻印を施したに違いない。

……今の今、悟った事は、隣人よりも自分を愛さぬ者はいないということではないか。……

……愚か者の眼前で新式の思想を披瀝すれば、かれらはあなたが馬鹿で、おまけに価値もないと思うだろう。  
また、あなたが、学問で名が通っている人々よりも秀れていると思われる場合には、あなたは憎まれるだろう。